

人生詰んだから、異世界または惑星を創造しよう。

ぽぬぽぬ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生だった主人公が人間関係に嫌気を差し勝手に大学をやめて親に勘当され数十年がたち通り魔に刺されたところから物語は始まる。

目次

まじこれからどうしようかな？	1
水の中みたいなの？	4

まじこれからどうしようかな？

「っはあ〜」

今日大学を辞めた別に何かを成し遂げるために大学に通っていたわけじゃない

親に一般企業に入るための肩書か資格は持っておけと言われて入っただけのFラン

大学だ。

「ふう〜ああああこれで自由だ」

本当に嫌になってくる人間関係に使う時間や労力には嫌悪感しか感じない。

親からの叱責、期待や希望を自分の将来に当てはめてくる傲慢さ
もう自分には希望が持てない、そうして時間が流れようやくわかつた。

「そうだ、俺は何かを行動に移すときに周りに流されすぎている」

そう自然と口に出していた。

「これからどうするか、いつそのこと自殺でもしようかな？」

あまり長く人との関わりをもたないと独り言が達者になってくる。

「よし、とりあえずカラオケかラーメンを食べにいくか。」

俺は大学を後にした。

~~~~~

大学をやめて3日が経った

家に居る俺を不審に思った親が大学に電話をかけて大学を勝手にやめたことが

わかってしまった。

ドス ドス ドスと階段の音が聞こえてくる。

ああ、最悪だ何を言おうが殴られる。もしかしたら殺されるかもしれない

ドンドンドンと俺の部屋のドアを乱暴にノックする音が聞こえてくる。

「……………」

俺はドアのほうを見て腹を括る。

「開いてるよ」

そう他人事のように

ドスつと鈍い音が鳴った、思考することを脳が拒んでいる。

「おい、なんで勝手に辞めた」

父が低い声でそう一言いった。

「っ！」

俺はただ痛み悶えていた。

考える時間も、もつたない喋ってたまた殴られたくないと内心おもっていた

「もういい！、お前と会話するだけ無駄だ二度と家の敷居をまたぐなア!!」

まごうことなき勘当宣言だった。

「っ！わかった」

ああ、やっぱり俺はまた流されている人に依存している。

こんな自分が心底嫌いだ。

俺は、自分で買ったものだけ整理し家を出てった。

~~~~~

あれから、ただただ時間だけが砂時計のように過ぎていった。

「まじこれからどうしようかなっ…」

そうつぶやく、勘当されてから23年の月日が経っていた今は低賃金ながらも仕事をもらっている。

衣食住も確保し貯金も3桁になった人生これからだった
けれど…どうしてこうなった

「つかは！うぐうううう」

「へへ、やったぜこれで明日もなんか食って暮らせる」

男が何か言っている「つぐー」つうもうあまり長くないと分かった
最後の力を振り絞り俺を刺したであろう凶器を取り男に向かって
構えて振りかざした

「うおおおおりやあああああああ」

「へっ馬鹿がそこで死んどけよおっさん！」

男がそう言い俺の傷口に蹴りを入れた。

そ　こ　　で　お　れ　の　い　し　き　　が　と
だ　え　……………

水の中みたいなの？

「……………」

何だ？体が思うように動かせない…………… 目も開けている筈なのに目の前が暗い

どうしてだ？それに俺はあの後すぐ意識を失ったはず……………

とりあえず今は状況の確認をしよう

思考することはできる、体は動かせない、視点移動はできる

息は……できているのかわからない、匂いはこの場合あまり関係ないな

生理現象の類は感じない…………… 時間の感覚もよくわからない

「あーあ」

声？は出ているような頭の中で響いているようなよくわからない感じだ

今の状況を簡単に言葉にすると

「絶望的だ何なんだこの状態は？」

まあ、愚痴を言っついても今のこの状況が解決するわけじゃない
テンプレ的な展開で言うとな神様みたいな存在がいるはずなんだが
「そういう感じでもないよな〜」

でも今の状態を振り返るに生きて？はいると思う

異世界転生系モノや転移系だと何かしら力やチート的なものがあるけど

「もしかして魔法的な不思議な力があるのか!？」

俺は手があるであろうところに集中し意を決して唱えてみる

「……ライト」

手があつた生まれたての赤子のような手だ。まるで今作られたように。

その手のひらには小さな光の玉がある状態で

「つうお!!」

少し驚いてしまった急に光を目に入れたからだ

そしてまさか本当に使えるとは思つてもみなかつたからだ

だが、少し経つと光の玉は消えてしまった

そしてあることに気づくさつきまで全く動かなかつた体が動くようになったのだ

つまり体感が戻つたのだ。時間の感覚も何となく進んでいるような気がしなくもない

それに何だか体の中心もつと詳細に言うならば心臓付近に妙な感覚を感じる

「うゝん不思議だ」

俺は魔法（仮）？を使えるっぽい？

とりあえず確認できた手で顔の輪郭を調べてみよう

つるつるとした肌はやはり顔も？赤子のようだ

まあこれで顔だけ40過ぎのおっさん面だったら相当なホラーだが

「っ！そっ！そうだ！一番大切なあれを確認しなければ!!」

俺は下半身の方へ手を伸ばす

「へっ？…はあゝ」

どうやら今世？では女だったようだ自分の局部のモノで確認できた

「はあくまじかよ」

うすうす感じてはいたが

口に出さずにはいられなかった何故なら

「俺は真性の童貞だったはず」

そうつまりは魔法使いだったのだ40過ぎたおっさんが

夜のお店にも通わず純潔を守り通したのはむしろほめてもらいたい

まあ実状は働いていたところの立場的にいつ首を切られても

おかしくなかったからだ

「まさか本当に魔法使いになってしまおうとは思わなかったなかな」

今、ふと思ったが赤子の状態なのに口から流暢な言葉が出ている

「小説で言えば言語理解や翻訳に近いスキルと言ったところだが……」

よしここはテンプレをなぞっていこう

「……ステータスオープン」

ブオン、そう鳴った気がした

【名無し】LV1

【状態】正常

【持ち物】なし

【知力】6(+31)

【防御力】0

【筋力】2(?52)

【功魔】12

【敏捷】1(+24)

【防魔】6

【魔力】36(+4)―37

スキル

【?】(神級) 【空気を読む】(中級) 【思考加速(停止)】

【妄想(上級)】 【鑑定(初級)】 【オカルト(中級)】

【称号】

うつ病患者(中)

中二病(大)

異世界からの???

精神異常者

ただのバカ

「おおくマジで出てきたよステータス」

何かスキルと称号にけなされてるような気がするがここはあえて触れないでおこう

いくつか読めない場所があるけどこれは鑑定のスキルを

自分に対して行っているからか鑑定スキルが初級だから見えないのか

それとも単純に自分のLVが低いから見えないのかわからない

「ん？」

あれ、魔力の数値に○の横にマイナスが付いてる何か嫌な感じが

「っあ」

またこのパターン